

自分の得意なことと世の中のトレンドが重なると、 きっと仕事は楽しくなるはず

～株式会社オールアバウト・代表取締役社長兼CEO 江幡 哲也さんインタビュー～

江幡 哲也さんプロフィール



金井高等学校 第6期卒業生（1965年生まれ）

3年11組（植松春夫先生級）

武蔵工業大学（現 東京都市大学）電気電子工学科卒業。

1987年 株式会社リクルート入社。エンジニアとしてキャリアをスタートし、その後数多くの事業を立ち上げる。

2000年6月 株式会社リクルート・アバウトドットコム・ジャパンを設立。代表取締役社長兼CEOに就任。

2004年 7月株式会社オールアバウトに社名を変更。

2005年 9月JASDAQ証券取引所（現 東京証券取引所スタンダード市場）上場。

現在は、祖業であるデジタルメディアをはじめとして、デジタルマーケティング、広告業界DX、グローバルマーケティング、トライアルマーケティング&コマース、ヘルスケア、ベンチャー投資などグループ経営で事業を拡大。

新経済連盟幹事、東京都市大学客員教授などを務める。

AllAbout

株式会社オールアバウト（All About, Inc.）

所在地：〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南 1-15-1A-PLACE 恵比寿南 3F

主な事業内容：専門ガイドによる総合情報サイトの運営インターネット広告事業

事業開始：2000年6月

資本金：13.18億円（2025年3月末現在）

主要株主：日本テレビ放送網株式会社、株式会社NTTドコモ

従業員数：130名（グループ280名）（2025年3月末現在）

東京証券取引所 スタンダード市場 2005年9月13日上場

今回は、専門ガイドによる総合情報サイト All About の運営を中心とする株式会社オールアバウトの代表取締役社長で、金井高校第6期卒業生の江幡哲也さんにお話を伺います。

——江幡さん、本日は母校50周年企画にご協力いただき、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

江幡：こちらこそ、よろしくお願いいたします。

——早速ですが、株式会社オールアバウトについて教えてください。

江幡：オールアバウトは、2000年創業のITベンチャー企業です。2001年に「All About」というウェブサイトからスタートしました。これは、各分野の専門家が信頼できる情報を、様々な生活分野で発信するメディアです。

当時、インターネットが普及し始めたばかりで、SNSやブログといった個人が情報を発信するウェブサイトがまだ少ない時代でした。その中で、個人が顔と実名を出して各分野の専門家として信頼できる情報を発信する大規模なサイトとして注目を集め、大きく成長しました。創業から25年が経ちますが、現在も月に約2,600万人の方にご利用いただくサイトとして成長しています。

現在は、総合情報サイト「All About」をベースに、グループとして多岐にわたる事業を展開しています。例えば、インターネットショッピング分野や、様々なベンチャー企業への投資事業などです。最近では、新たにネット銀行業にも参入するなど、多くの事業をオールアバウトグループとして展開する企業に成長しています。

——その株式会社オールアバウトに、江幡さんはリクルート社時代に設立から携わっておられるわけですが、設立に至った経緯や、ご自身が代表取締役社長兼CEOに就任された経緯を伺えれば。

江幡：私は大学が理系なのですが、卒業した当時はちょうど通信事業が世の中で自由化・民営化される時代でした。その時にリクルートが通信事業に参入すると知り、そこに参加したいと思って就職したのがきっかけです。

リクルートでは、その通信事業に立ち上げる頃から携わり、エンジニアとして働き始めました。リクルートは「情報産業」という会社でしたので、エンジニアから始まり、事業を立ち上げたり、新規事業を作ったりといった経験をいくつかさせていただく機会に恵まれました。

そうして複数の事業を立ち上げる中で、1995年頃に世の中にインターネットが広がり始める機運があることを感じました。私はインターネットが始まる最初の世代から携わることができ、「これは世の中に大変な革命が起きる」と実感しました。

リクルートは今、皆さんご存知のホットペッパーやリクナビなど、様々なインターネットサービスを展開しています。情報を得て比較検討し、予約したり、進路を決めたり、ものを買ったりするサービスが数多くありますね。しかし、インターネット時代が来るまでは、それらを紙媒体で提供していました。例えば「住宅情報」のような雑誌が、本屋や駅のキヨスクに置かれていたんです。

私はインターネットに初期から携わった経緯もあり、リクルートの各事業をインターネット化していく責任者として、1990年代後半にその役割を担うことができました。

その経験を経て、インターネットがどんどん普及していく中で、「もっとこんな事業もできる、あんな事業もできる」と常に考えていました。アメリカが当時インターネット先進国だったので、現地に赴き、先行しているインターネットサービスやその変化を学び、経験しました。そして、「日本でも様々な新しい事業が必要になる」と感じたのです。

その中の一つが、現在私が手掛けている「All About」のアイデアでした。当時、私はリクルートでそういった事業を開発する部署の責任者でもあったので、正直、多くの事業を手がけたかったのですが、その中でも特に「All About」に惹かれ、「ぜひ自分でやりたい」という強い思いが芽生えました。そこで、「これはもう独立してやろう」と決意しました。

先ほど申し上げたように、2000年はインターネットがより一般の人々にも普及し、誰でも使える環境になるブロードバンドが始まるタイミングでした。この好機を逃してはいけなないと考え、独立し、自分で会社を設立・創業したという経緯で、代表に就任いたしました。

——設立後、現在に至るまでに苦労された点、良かった点など、差し支えない範囲でお話いただけますか。

江幡：もちろん、新しい事業をゼロから立ち上げる場合、想定通りにいかないことは山ほどあります。ですが、大抵はそういった苦難を「苦しい」と感じる人は、そもそもそうしたことにはチャレンジしないものです。

私にとっては、リクルート時代も様々な事業を立ち上げてきて、思い通りにいかなかったり、色々な人に批判されたりという経験はいくらでもありました。しかし、それら全てを「全く問題ない」と

思える性格なんです。そこを乗り越えて、「なぜこれをやらなければいけないのか」「やるべきことはこれだ」という確信と、「自分にはできる」という思いしかなく突き進んでいくタイプです。起業家は大概そうですが（笑）。そういった意味では、一般的な方から見れば苦勞の連続かもしれませんが、私は全く問題だと考えていません。

そうは言っても、やはり起業すると、計画通りにいかないとお金がどんどんなくなっていきます。会社はお金がなくなりさえしなければ続けられますが、お金がなくなるとそこで終わり、倒産してしまいます。最初に立ち上げた時、計画ではだいたい3年から4年後ぐらいには事業がちゃんと利益を出せる構造に成長し、それまでにかかったお金を回収して浮上していくとっていたのですが、若干それより遅れ、お金が足りなくなりそうになった時もありました。そういった時はやはり苦勞しましたね。

あとは想像もしていなかった、自分たちではどうにもならない「環境変化」にさらされる時に、大きな苦勞がありました。例えば、2008年頃の世界的な経済危機であるリーマンショックや、その直後の2011年に日本を襲った東日本大震災です。2009年頃から2011年頃にかけては、自分たちではどうしようもない経済環境の変化や、震災という自然災害が会社の経営に大きな影響を与え、ガタガタになったんです。これは私たちだけでなく、多くの企業が経験したことです。前の年の売上がいきなり40%減ってしまうといった状況は、もう本当に生き残れません。会社を構造改革せざるを得なくなります。例えば、一緒にやってきた仲間でも、違う会社に移ってもらうといった苦勞の決断をすることもありました。事業での苦勞は全く問題ないのですが、そういったことによって人間関係、つまり社員の皆さんとの関係で大きな苦勞が発生することが、私にとっては唯一「苦勞」と感じる部分かもしれません。

—現在、株式会社オールアバウトの強みは何であるとお考えですか。また、今後、どのように展開していきたいとお考えですか。

江幡： オールアバウトグループの強みは、一番に「信頼性」だと考えています。今、世の中ではSNSなどを使って様々な情報を得たり発信したりしていますが、誰もが言いたいことを発信していますよね。例えば選挙などがあつた際に、「何を信じていいのかわからない」というように、いわゆる玉石混交の情報が跋扈（ばっこ）しています。

そんな中で「All About」というメディアは、25年の歴史があり、常に「信頼性」という、大切にする理念を揺るがさずにやってきました。こういったブランドは非常に強いんです。このブランドをベースに、他に進出しているインターネットショッピングや他の事業にも、この信頼性が生きています。ですから、オールアバウトの一番の強みは、この信頼性、そして信頼性のブランドをぶらさずに維持している点だと思います。

二番目の強みは、25年間、ネットの黎明期からずっと事業を続けてきているという「歴史」です。この間、インターネット業界のエコシステム（生態系）は、様々な会社が華々しくデビューしては潰れたり、買収されてなくなったりするのが当たり前の世界でした。しかし、私たちは着実に成長し続けてきています。このノウハウは、ただ積み重ねてきただけでなく、新しい事業へと展開する際にもすべてが生きてきます。

例えば私たちが展開する「All About」というメディアは、インターネット全体の中の一つのメディアに過ぎません。これまではこの一つのメディアの中で商売をしてきました。例えば、サイトに訪れる人に広告を見ていただいて広告ビジネスを行う、といった形です。しかし、テクノロジーが進化し、インターネット全体が皆さんにとって一つの「メディア」になっています。ですから、私たちのビジネスも「All About」というメディアだけに留まらず、インターネット全体に網をかけ、事業を展開していくような変化が必要です。

そこで今、オールアバウトがこれまで培ってきた「デジタルマーケティング」、つまりインターネット、デジタルを使った企業のマーケティング活動に関する様々なノウハウやシステムをインターネット全体に渡って展開する新規事業にチャレンジしています。インターネット全体において、これまでライバルであったメディアも含めた多くの企業に、マーケティングビジネスを行うのに必要な共通機能を提供する「デジタルマーケティング業界のプラットフォーム（基盤ビジネス）」にシフトしようとしています。こうなると、「All About」だけで閉じていたビジネスに加えて、他の様々なデジタルマーケティングを手がける会社が行っているビジネスの一部分を支えるような共通基盤になるので、どこで商売が起ころうともその一定量が私たちの売上になります。そして、インターネット全体に網をかけられるので、皆さんの様々な情報接触や購買といったシーンのあらゆる場面で役立てる、こんなポジションチェンジを進めています。これが、これまでの私たちが培ってきた歴史、ノウハウ、システムがあるからこそできることなんです。このような展開で、これまでも、そして今後も成長してい

けるのが、私たちの強みだと考えます。

—金井高校卒業後、工学部電機電子工学科に進まれたそうですが、どのように考えて進路を決められたのか、また、その進路がどのように現在の仕事につながっていったのか、現役高校生が進路を考える上で参考になるようなお話をいただけますでしょうか。

江幡：そうですね、まず一番重要なこととして、「世の中にどんな仕事があるのか、どんな業界があるのか」を知ることから始めたらいと思うんですね。

私は高校の時、3年生で理系、文系、文理系と3つに分かれました。私は数学や物理が得意で、理系という分野に自分の特性が向いていると感じたので、理系クラスを選びました。

そして、先ほども話しましたが、「この先世の中はようになっていくんだろう？」と考えた時に、自分の得意なことと世の中のトレンドが重なると、きっと仕事は楽しくなるはずなんですよ。ですから、私は高校生の頃からそういったことを、周りの大人たちとよく話していました。

私が高校生だった当時は、まだコンピューターや通信、今でいうITという概念がない時代でしたが、どうも「情報社会」という方向に向かいそうだと感じていました。祖父の話や父が工作機械という工場の生産現場でモノを作る技術者だったので、そういった社会の動きを聞いたりする中で、「これからコンピューターや通信といった情報社会が、ものすごく世の中を変えていくのではないか」と思ったんです。

そこで、その分野に近いところ、自分が得意な理系であり、かつ伸びていけよう分野ということで、工学部を選びました。さらに私が進学した武蔵工業大学（現在の東京都市大学）の電気工学科には、原子力学科があったんですね。私は中学生の頃から原子力に少し興味があったので、原子力研究所を持っていて実際に原子炉に触れられるという、非常に珍しい学校だったこともあり、自分の得意なこと、興味の範囲、そして世の中のトレンドが重なるということで、その学部を選びました。

実際、当時、そんなことを考えて学校を選んでいた同期はいませんでしたね。ほとんどの人が、自分の得意科目ぐらいかな、という程度で進路を考えていたと思います。大学に入ってから、就職を考えるときに、同期はあまり真剣に考えずに適当に選んでいた時代でした。なので、私は少し変わっていたのかもしれませんが。

でも今はインターネット社会で、世の中にどういう仕事があって、どういう産業が伸びるのか、あるいは今すごく大きな産業でも、もしかしたらこれから大きなITの変化でなくなってしまうかもしれない。例えば、昔はフィルムカメラしかありませんでした。しかしデジタルカメラが登場し、フィルムカメラの売上はなくなってしまいました。さらにデジタルカメラですら、スマートフォンが登場したことで、ほとんどなくなってしまいましたね。こうした変化が起こる時代です。だからこそ、興味があるような世の中の産業や変化を見てみるということが必要なのではないかなと思います。

—江幡さんは、金井高校時代、どんな生徒でしたか。部活動はされていたのでしょうか。エピソードや思い出を交えてお話しいただければ。

江幡：はい。私はですね、子供の頃からずっと運動ばかりしてしまっていて、剣道を長く続けていました。中学の時は陸上もやっていて、足も速かったんです。

高校の時には、やはりスポーツ系の部活動をやろうということで、陸上はもう走りきったからいいやと思っていました。そこで、「高校デビューでもまだ遅くない部活動」ということで、ハンドボールを選びました。

ハンドボール部では、私たちの同期が4人新しく入部したのですが、なんと1年目の終わり頃に、先生と先輩が喧嘩をしてしまって、先輩たちが全員辞めてしまったんです。部員がほとんどいなくなるという状況になりました。そんな中で、私は唯一辞めなかったんです。そこから部を立て直し、同期4人と一緒に高校3年の時には県大会でそれなりの成績を収められるようになった、というところが、一番の思い出です。

その後もハンドボールは、社会人チームで仲間と一緒に少し続けていました。とにかく運動ばかりしてしまっていたね。あとは、運動が終わった後はアルバイト。そして勉強は授業中のみ、ということで、授業は一生懸命真面目に受けていました。

—高校時代のイベントで、印象に残っていることは何ですか。

江幡：今はどうか分かりませんが、金井高校のいわゆる体育大会、運動会は、ほかの高校に比べて非常に大がかりで、県立の陸上競技場で開催していたんです。確か湘南台か藤沢の県立陸上競技場だったと思います。すごく華やかな舞台でしたね。※編注

私は幸いにも運動ばかりしてしまいましたが、中学時代に陸上をやっていて足も速かったので、その時に確か走り高跳びで競技に出場しました。全校生徒の注目の中、最後まで残って、すごい拍手のもと、何か華やかな舞台だったことが今でも記憶に残っています。卒業アルバムにも大きくその写真が残っ

ており、私が高跳びを跳んでいる瞬間の写真を見返すたびに、「いい思い出が残ってよかったな」と思っています。

——同じく高校時代の先生や授業で印象に残っていることがありましたら。

江幡： 植松先生に、確か高校3年生の時に数学を中心に教えていただきました。本当に「理系クラスを選んでよかったな」と、その時その先生と一緒にいて授業を受けて良かったという思い出があります。自分が得意だったところが、その3年生の時にさらに伸びた感覚があります。成績も伸びて、幸い良い成績だったのですが、先生がすごく応援してくれて、良い気分させてくれた思い出がありますね。不得意なことをなんとかするより、得意な方向を伸ばすことを頑張ること、これをお勧めします。

——高校時代に学んだこと、経験したことで、現在の自分に役立っていること、力になっていることがありますか。

江幡氏： 先ほども言った通りですが、高校生の時から「世の中がどうなるか」「自分が何に向いているか」といったことを考えていたんです。理系に進み、先生やたくさんの方と話しながら「どうすればこの力が伸びるか」といったことを考えたり。やはり、何か先を考えて目的を持ち、それに向かって努力していく、というようなことは、多分高校の時から始められたことじゃないかなと思いますね。

ですから皆さんも、何でもいいから少し考えてみてほしいんです。「何のためにやるのか」「自分は何に向いているのか」といったことを考える癖をつけると良いと思います。

——卒業生として、金井高校の生徒の皆さんに伝えたいことがあればお願いします。

江幡： 私たちの時代と違って、今は情報社会で、皆さんインターネットやSNSを通じて、様々な情報を収集できますよね。私たちの時代よりもはるかに多くのことが分かります。

だからこそ、先ほども言いましたが、「自分が何をしたいのか、何が得意なのか、どうなりたいのか」、あるいは「世の中がどうなっていくのか、自分の興味あることが将来どうなるのか」といった「なぜ？」を、しっかりと考えることを持ってほしいんです。

これは金井高校の生徒だからということではないですが、高校生にとって非常に重要だと思っています。ともすれば、「自分は理系が得意だから、とりあえず理系の学部に行こう。大学に行って、あまり勉強せず遊んで、とりあえず試験だけ通して単位を取って卒業しよう。じゃあ就職か、どこに行こうかな。なんかあの会社が良さそうだなって適当に選んで入ろう」というようなことは、あまりよろしくない。高校時代ぐらいからそういったことを考えていって、「あ、違ったな」と思ったら修正していく。そうやって自分で先を考える癖を、ぜひつけてほしいですね。

そのためには、ただネットから情報を得るだけでなく、色々な人と話してほしいですね。それをお勧めします。そうした相談相手の一人として、金井高校には魅力的な先輩がたくさんいますから、そういった人に話を聞くのも良いんじゃないかと思えます。

——最後に、同期生を含む同窓生の皆さんへのメッセージをお願いします。

江幡： 先日、60歳になったので、「同窓会をやらうぜ」ということで集まったんです。たまたまその日にリクルートに関するイベントが別にありまして。何十年ぶりにやる同窓会と同じ日になってしまったんですが、何とか時間をやりくりして移動し、みんなと会えました。やはり昔の仲間というのは、いつまで経っても同じだなと思ひ、非常に良い気持ちになりました。

皆さん、社会でそれぞれ活躍されていたり、自分らしい生活を送っていたり、家族やお子さんとの時間を大切にされていたりと、様々な生き方をされています。こうした仲間との関係は一生続くものではないかと思えますので、今後でもできるだけそういった場に参加させていただきたいですし、ぜひ豊かな人生を一緒に過ごしていけるように、みんなで作っていただければいいなと思います。



WEB版同窓会報第4号より

本日はお忙しいところ、ご協力ありがとうございました。今後のご活躍を期待しております。

※編注：当時は藤沢市の県立体育センター（現・県立スポーツセンター）陸上競技場で、保健体育科主催の本格的な陸上競技大会が開かれていました。現在は、陸上競技大会は行われておらず、生徒会主催の“体育祭”が毎年開かれています。